

令和元年度第3回宗像市総合教育会議議事録

【日 時】 令和2年1月22日（水）午前10時から午前11時55分

【場 所】 宗像市役所 本館3階 304会議室

【出席者】 宗像市長 伊豆美沙子
教育委員 宮司葉子
教育委員 石丸哲史
教育委員 釜瀬計
教育委員 大庭多美枝
教育長 高宮史郎

【その他の出席者】 教育子ども部長瀧口健治、教育子ども部子どもグローバル人材育成担当部長中野万由美、経営企画部長長谷川勝憲、教育子ども部主幹指導主事安河内友美、教育政策課長中野道子、教育政策課指導主事毛利拓也、教育政策課指導主事村上暢崇、教育政策課指導主事出光洋文、学校整備プロジェクト室長狩野長江、教育政策課学務係長新海香浪、経営企画課企画係長中山崇、学校整備プロジェクト室推進係長井口綾、学校整備プロジェクト室主任主事花田経久、教育政策課政策係長福永貴志、教育政策課政策係主事鈴木夕貴
※傍聴 なし

1 開会

【伊豆市長】定刻になりましたので、只今より令和元年度第3回宗像市総合教育会議を開催いたします。今回の会議では、「福岡教育大学教育連携強化事業について」、「宗像市第Ⅱ期小中一貫教育の成果と課題(案)について」の2項目としております。教育委員の皆様から忌憚のない意見をお聞かせいただければと思います。どうぞよろしく申し上げます。議事進行につきましては事務局より説明をお願いいたします。

【教育政策課長】教育政策課の中野です。よろしく申し上げます。只今市長からありましたように、本日の議題は「福岡教育大学教育連携強化事業について」と、「宗像市第Ⅱ期小中一貫教育の成果と課題(案)」についてでございます。担当から説明を申し上げた後、質疑応答を行いながら協議をいただき、ご意見をいただければと思っております。どうぞよろしくおねがいます。では早速協議に入りたいと思いますので、ここからは市長に進行をお願いしたいと思います。お願いします。

2 協議事項

(1) 福岡教育大学教育連携強化事業について

【伊豆市長】協議事項の1項目目、「福岡教育大学教育連携強化事業について」です。事務局から説明をお願いします。

【学校整備プロジェクト室長】学校整備プロジェクト室の狩野と申します。よろしくお願いします。スクリーンに表示していますが、お手元の資料と同じですので、どちらをご覧いただいても構いません。福岡教育大学教育連携強化事業につきましては、福岡教育大学を軸として県立特別支援学校そして市立小中義務教育学校との連携を強化するものでございます。これまでも福岡教育大学の先生方や学生のみなさんから、宗像のまちづくりや各分野、各方面においてご指導ご協力をいただいています。今回は教育連携強化ということで、学校教育と福岡教育大学の教員養成の面で、連携を強化していく事業でございます。1ページ目の下段に書いていますが、福岡教育大学と令和7年度に開校予定の県立特別支援学校に対して、まずは地元である城山学園との連携を深めたいと思っています。その後その成果について、市内の小中義務教育学校に展開していきたいと考えています。2ページをお開きください。事業スケジュールについてご説明いたします。令和元年度は、福岡教育大学の川添副学長以下、学部の先生方そして教職大学院の先生方や事務局のみなさんと協議を進めています。そしてその内容について後ほど、4、5ページで説明いたしますけれども、令和2年度から具体的に福岡教育大学との連携強化を開始したいと思っています。また、県立特別支援学校につきましては、開校そのものは令和7年度でございますが、すでに福岡教育大学内に連携推進プロジェクトチームが設置されるなど、県立特別支援学校の開校に向けた連携の協議が始まっています。宗像市教育委員会としても、県の特別支援教育課とまだまだアイデアベースではございますが、意見交換を始めており、引き続き連携内容について、協議を進めていきたいと思っています。また令和7年度、県立特別支援学校の開校と同時に、城山中学校の新校舎も出来上がっていますので、その中でも、地域連携室や多目的室というのを整備する予定としていますので、そこからまたさらに連携が加速できるだろうと思っています。2ページの下に航空写真を表示していますが、城山中学校と県立特別支援学校の建築・建設の状況についてご説明をさせていただきます。城山中学校については今年度改築の基本計画について、ワークショップを開催しながら進めています。来年度以降設計を進め、早ければ令和3年度には実際の建設工事を開始するという予定としています。遅くとも令和7年4月には新しい校舎の供用を開始をすることとしています。また県立特別支援学校は、城山中学校からおおよそ1kmの距離にある福岡教育大学の敷地内を予定地として建設することとしています。知的障がいの小・中・高等部が設置される予定となっており、40学級程度の規模の県立特別支援学校が令和7年4月に開校されるということでございます。繰り返しますが、来年度以降の連携強化につきましては、この令和7年度の県立特別支援学校の開校や、城山中学校の新校舎完成で、さらに加速していくであろうと考えており、

城山学園におきましては、小中一貫コミュニティ・スクールが令和 3 年度以降進められていきますので、まさに地域の教育力、大変強力な教育力を活用した城山学園の学園作りに寄与できるものと考えています。そして、来年度からの福岡教育大との連携強化でございりますが、まずコンセプトについてご説明いたします。3 ページの上段に地の利を最大限にいかした WIN-WIN の連携と書いていますけれども、まずはこの絶対的な距離の近さを最大限にいかした連携を進めていきたいと思っています。児童生徒そして学校また福岡教育大学の学生や大学、それぞれにとって、WIN-WIN となるような連携にしていきたいと考えています。学校にとっては出前授業や、校内研修において指導助言をいただけたとか、学生ボランティアの参加によって、人的な支援が期待できるところです。また学生や大学にとっては学生の指導力そして経営力の育成というのが、大変近くでできるということや、実習先を確保できるということも言えますし、福岡教育大学の研究の深化も期待できると考えています。3 ページの下段に示していますが、今年度先行的に取組みを進めています。3 ページ下段左側には、城山中学校 3 年生が、福岡教育大学のアカデミックホールで教職大学院の学生とともに、学習をしている様子です。城山中学校で防災訓練を行ったのちに、歩いてアカデミックホールまで行きまして、講義を聴講後、災害発生時に私たちができることは？というテーマのもとに各班に分かれ、教職大学院の学生さんがファシリテーターとして、議論の深堀りを行いました。まさにこの距離の近さをいかして福岡教育大学の施設、そして人的資源を活用して、多様な学習機会を設けることができた事例と思っています。また右側ですけれども、吉武小学校の教室の写真でございまして、福岡教育大学の研究室で作った小冊子を教材として情報モラルについて小学校 5、6 年生を対象に学習を行った写真でございまして、中身はイソップ寓話ですとかアンデルセンの寓話を例として、平易な内容で子どもたちに情報モラルについて、村田先生が学習指導を行ったというものでございまして、学校現場におきましては先進的な教育を得ることができまして、また村田先生においても学会でこの内容を発表予定と聞いています。このように先行的な取組みを行っており、令和 2 年度以降にさらに具体的に進めていきたいというふうに考えています。続きまして 4 ページをご覧ください。令和 2 年度以降の具体的な連携強化の内容についてお知らせいたします。1 つ 1 つは従前の内容と重なったところがありますが、福岡教育大学の考えていること、また受け入れ側の学校が期待すること、これらをあらかじめ福岡教育大学と城山学園としっかり情報共有をした上でこの取組を進めていきたいと思っています。まず①教育実習生の積極的な受け入れでございまして、城山学園の強みをいかした積極的受け入れとしています。4 ページ目の下段に書いていますが、福岡教育大学の附属校と城山学園、それぞれの強みをいかした実習受け入れをすることができればと考えています。附属校においては、比較的教科指導力に重点を置いた実習がなされていると聞いていますけれども、城山学園においては教科指導のみならず、生徒指導や保護者対応を含めた、丸ごと教師体験という形で教師の総合力を養っていくことができればと考えています。福岡教育大学の先生が就職 1 年目ギャップというのがあ

とおっしゃっていたのですが、あまり学校の実情を知らないままに学校現場に教員として入り、その現実を目の当たりにして、自信をなくして早々に教職を去るということが起きていると伺いました。我々としては、まずはこの教育実習において、しっかりと学校現場の現実というのを学んでいただいて、その後の教員生活に役立てていただければというふうに考えています。続けて②学生ボランティアの継続的受け入れでございます。これにつきましては先ほど申し上げました教育実習は、4年間でおよそ30日と聞いています。この教育実習の前後にボランティアを組み合わせることによって4年間しっかり学んでいただきたいと考えています。先ほどの距離の近さを最大限にいかしたというふうに申し上げます。この距離ですと、授業の合間にボランティアに参加することができると思っています。前後しますが、遠くで教育実習する場合には学生の皆さんマンスリーマンション等を借りられて、教育実習を受けられているというふうに聞いていますので、生活基盤のある宗像で教育実習またはボランティアにしっかりとエネルギーを注いでいただくということは、経済面においても大きなメリットではないかと考えています。続きまして、5ページの上段の③出前授業・共同研究・研修会講師等についてです。先ほど城山中学校の防災学習の例をあげましたが、そのような先生方による専門的な指導や、先進情報を学校現場で共有することができると思っていますし、また学校側の課題を吸い上げた上で、共同研究も考えられるのではないかと考えています。すでに来年度に向けて赤間小学校から新しい学習指導要領の中でもプログラミング教育、そういったところで福岡教育大学の支援が欲しいという話がございます、古川先生に来年度、出前授業等を行っていただく予定にしています。続きまして、④卒業する学生を講師として受け入れることについてでございます。これにつきましては残念ながら採用試験に不合格の学生で、宗像に残ってもう1度教員採用試験を再チャレンジしたいという方がいらっしゃれば、特に実習やボランティアに参加された学生さんを含めてあらかじめリストアップしておき、小中義務教育学校の講師や学力向上支援員、そういったところで受け入れをしたいと思っています。これについては我々の学校教育の現場についても人材集めに大変苦慮していますので、ぜひとも福岡教育大学の卒業生の皆さんに宗像の学校現場で頑張っていただきたいと考えています。続きまして⑤城山学園連携コーディネーターの役割ということですが、これについては福岡教育大学そして学校側の負担を軽減するためにコーディネーター、専門の職員を配置したいと考えています。すでに現在この企画段階から経験豊かな教員OBを配置していただき、大学・学校の連携強化に努めていきたいと考えています。最後に⑥地域連携室の設置。これにつきましては、先ほど城山中学校の改築の説明の中で少し触れましたけれども新校舎の中に地域連携室を設置する予定としています。教育実習生の作業スペースや引率教官の控え室、情報共有のスペースということも想定しています。これについては中学校の先生のみならず福岡教育大学の先生方からもヒアリングを行いまして、今後のこの地域連携室の整備について検討を深めていきたいと考えています。まさに連携強化の拠点として位置付けることができると考えています。続き

まして最後 6 ページでございますけれど、県立特別支援学校との連携でございます。具体的な連携内容の検討というのはこれからというところですが、令和 7 年度にはこの特別支援教育の拠点が形成されるということもありまして、しっかり連携を図っていきたいと思っています。6 ページ下段の左側、特別支援学校には地域の特別支援教育のセンター的機能が求められています。1 から 6 まで記載してありますが、このセンター機能をしっかりと市立の小中義務教育学校としても、享受したいと考えています。県立特別支援学校に通う児童生徒の特別支援教育の充実や利便性の向上のみならず、市立の小中義務教育学校に通う児童生徒への特別支援教育の充実を図っていきたいと思いますし、また保護者の相談体制の充実も図っていきたいと考えています。また 6 ページ下の右側、これは特別支援学級数と児童生徒数の推移のグラフですが、およそ 10 年間で倍増という状況でございます。先の議会でも少し議論となりましたけれども、先生方の特別支援教育の指導力量の向上を図っていきたいと考えています。全ての学級に学び辛さを持つお子さんがいるということを前提に全ての教員の資質向上につなげることができればと考えています。また、最後に地域との連携、交流啓発活動の実施について、障がい者理解や特別支援学校そのものの理解を深めていかなければならないと考えています。これは令和 7 年度の開校を待たずとも前倒して、事業を実施できればと考えています。以上、福岡教育大学教育連携強化事業についてご説明いたしました。

【伊 豆 市 長】事務局からの説明は終わりました。ここからは、委員の皆様と福岡教育大学との連携強化について協議に入りたいと思います。皆様方から何かご意見やご質問がございましたらお願いいたします。私からよろしいでしょうか。まず、教育関係に関わっている人たちにとっては、特別支援学校が何かということは分かりますが、一般の市民にとっては、まだまだ浸透していないので、特別支援学校が福岡教育大学にできることで生み出す効果や、特別支援学校がセンター的機能を負うといっても、それが宗像地域の教育にとって、どのような影響があるのかということが分からないという前提で伝えていかなければならないと思います。折角これだけの教育に関するコンテンツがあるので、これ自体を教育文化都市の宗像の玉として多くの人に知らせていく際に分かりやすく伝えていかなければなりません。引き続き、様々な場において、私もこのことはお話をしていきたいと思っています。そして、教育関係者以外の人や親御さんに対して、特別支援学校が教育大学にできるということ、そしてセンター的機能をもつということが宗像全体の教育にどれだけの波及効果があるかということを伝えていただきたいなと思っています。福岡教育大学は、卒業生のうち 8 割の教員採用を目指していますが、現在は 7 割にとどまっています。大学と連携し、大学生が実際に教育現場に行くことによって、先生ってすごくいい仕事よねというふうに思ってもらえるような連携体制を作っていただきたいと思っています。私の想像ですが、大学に行っても何か褒められたり、あなたはこの職業に向いてるなど、将来を後押しする教育ってないですね。あくまでも普通に授業を受けて、単位を取り、後は自分で試験を受けて会社に入ってくださいっていうような中で、みんなよく分からないけ

れど、何となく自分の進路を決めていくという中で、先生というかけがえのない仕事を選びたいような後押し的な連携ができることを私自身は非常に望んでおります。その辺を何としても7割の教員採用試験合格率を8割にし、そして受かるだけではなく、先生になりたいと思ってなっていく学生たちの育成に役に立てて欲しいなというふうに思っています。以上です。何か他にありますか。

【教育子ども部長】まず連携強化事業についてですが、これから計画を進めていきますので、その都度、一般の方に知らせていきたいと思えます。城山学園との連携についても、城山学園以外の学園やコミュニティについても広く知らせたり、学校運営評議委員会で知らせるなど、いろんな手立てを考えて、やっていきたいと思えます。城山中学校と特別支援学校の2つの事業は、教育長が就任されてすぐに提案された、2つの大きなハード事業を有機的に結びつけるという、非常に画期的な発想であり、この2つの大きな学校が、夢と期待を与え、この意義を広げる提案だと思えますので、市長が言われるように市民理解を求めていきたいと思えます。それから、教育大ですけども、市長がおっしゃる通り、先生になるなら宗像で福岡教育大学に通い、先生になろうと思ってもらえるくらいのPRをしていきたいと思えますし、実際にその効果も見ていきたいと思っております。

【高宮教育長】私だけが考えたのではなく、皆さんで考えました。私は地の利を生かしたいと思っております。宗像市にこれから先生になろうという人たちを集める大学があるので、その学生さんの力と学生を育てている教授の先生方のお力、これをどうにか宗像市内の学校はもちろん地域や住民の方まで取り入れ、力を貸していただくことはできないかなという発想でした。おそらく、城山中学校は、5～60年に一回の建て直しであろうと思えます。県立学校に至っては、宗像市に開校するというのは並大抵のことではないだろうと思えます。この2つを一緒に立ち上げていくうえで、ソフト面はもう今から取りかかっておかないと間に合わないだろうと思えます。そして建物もお金はないのですが、例えば城山学園にある多目地域連携開放ルームを使って、もっと積極的に、大学の専門の先生に地域に出てきていただいて、例えば科学なら科学を面白く教えてもらうとか、歴史のある部分を詳しく教えてもらうとか、そういういろんなことをして活躍していただけないかなと思えます。それは地域住民にとっては学びの場、生きがいの場になっていくことだと思えます。大学から見るとどうでしょうか。

【石丸委員】教育委員としての立場でお話をさせていただきます。市長が先ほどおっしゃったように、福岡教育大学には不本意ながら入学した学生がいるわけですが、その大きな理由は福岡教育大学が教員免許を与える大学であるという認識によるものでだと思えます。私がよく言うのは、福岡教育大学は教員免許を与える大学ではありません、教員免許を与えるのは都道府県教育委員会であり、福岡教育大学は教師にする大学ですと言っています。しかし、将来何になるかは別として、教員免許はとりあえずもらいたいのので、そのために福岡教育大学を志望するというパターンが少なくありません。そういう意味で福岡教育大学が変わらないといけないのは、教員免許を与える大学というよりは教師に

する大学と認識されるようになることです。そういったところを市民の皆さんなど、大学の周りにいらっしゃる方に認識していただく、そういうふうに見ていただくことによって、大学自体も変わるのではないかと思います。福岡教育大学を取り囲んでいるのは宗像市ですから、宗像市がそういう形でアクションを起こすと言うのは、福岡教育大学を良い方向に向かわせるという、大きな効果があるかもしれません。もう1つは福岡教育大学の使命は、これまでは教育に関しての知識や技能を授けることでした。今では、教育に関する知識や技能を授けるのではなくて、有為な教師にさせるということ、そういう見方でないと駄目ではないかと私は思います。そうなりますと、教師にするというトータルなサービスを提供するとなると大学だけでは不十分なところが当然出てきます。そこは外部にお願いした方が、かえっていいのではないかと思います。そういったものがこの事業と大きく関係するのではないかと思います。まさにその見方で行くとWIN-WINの関係になろうと思います。ぜひ教師にすることを使命にする大学とし、それを例えば宗像地区、城山学園でサポートしましょうというスタンスで臨んでいただくというのは、宗像市として非常に重要なものではないかと思います。そして何よりも、単純なことではあります、近いということは大変ありがたいことで、ボランティアとして出向くときに、赤間小だったら2時間目と3時間目が空いている時に行き、また戻ってきて授業を受けることができます。小刻みに時間を使えるということは、大変ありがたいので、その辺りを個別に教員と協議するという、そのようなやり方も有意義だと思います。何しろ大学というのはショッピングモールみたいなもので、個人商店がたくさん並んでますので、入り口の総合カウンターに行っても、具体的にはそれぞれのお店に行ってくださいみたいな感じになると思うんですよ。だから入り口のカウンターでいくら協議しても必ずしも個々のお店でうまくいくことはありません。何れにしても教育大学の周りが教育大学を変えるということもできますし、そのことによって、福岡教育大学の使命、ミッションを再確認するいいチャンスではないかと思います。そういう意味でも、積極的に展開していただければと、教育委員として考えております。

【伊豆市長】他にはございませんか。

【大庭委員】今日のお話を聞いて、教育大の連携強化、それから特別支援教育の充実というのをこれから期待でき、計画が進んでいるんだなと感じましたが、2点少し心配なことがあります。1点目は特別支援教育についてですが、私が現場にいる時も、宗像市が以前特別支援教育の指定を文科省から受けたということで、専門の機関に小学校に上がる際、どこに転入したら良いか親が相談すると、宗像市を勧められたと聞きました。また、通級指導教室がある学校を希望して、県外から引っ越して来られるなど、以前から特別支援教育に対するそのような傾向はあったと感じています。実際に建ってみないとその傾向が強くなるのか、どうなのかというのは予測できませんが、自分がそのことを感じたことがあったので、もしかしたらそういう傾向が強くなった時の対応も計画の中にあるのかなと思いました。2点目は、教師になる割合を増やそうと教育大学も工夫しており、現場にいた頃に何回か魅力ある仕事ですよ伝えるために講義に行かせてもらったんですけど、やはりい

ろんなところの場を聞いても教育実習というのは大きくその人の思いを変えていく一つの機会になっているというふうに私も聞いたんですが、学校現場の苦勞を受け入れるというのはある意味、教育大学のボランティアとしていっぱい私たちが助けてもらってるからと言うのであったら、現場が受け入れるときには、現場はそれなりの覚悟というか、学生さんが先生になりたいという思いをもたせるような工夫というか覚悟を持って受け入れなければいけないんだなと感じました。実は一昨年、他市で教育実習に行った子どもの指導案がどうしてもできないので、見てもらえませんかと教育大の先生から言われたので、関わったんですけど、受け入れることはいいと思いますが、受けるうえで覚悟や体制、そういうものがないといけないと思いますので、受け入れる際の現場の体制も整えていかなければならないと思いました。

【伊豆市長】そのようなソフト面の連携については、今後、宗像市と教育大学が密に連携し、体制をととのえていく話し合いの場を今から設けていかなければいけないというふうに思っております。

【学校整備プロジェクト室長】今のは受け入れ側の人材育成の覚悟という理解でよろしいですか。実際我々も城山学園の先生方とお話しているところですけども、やはり現場の先生方も時間的にも人員的にも余裕がないという話は確かに承知しています。教育実習を受け入れる際に、予め、事前指導・事後指導をまとめて行うなど、負担軽減方を検討したいと思います。また人材育成の面についても、学校の先生方は大変だとは思いますが、近々自分たちの同僚になる職員をしっかりと育てていただき、先生方自身の OJT 力の強化というところで、前向きに捉えて受け入れていただきたいというふうに考えているところです。学校現場と大学が WIN-WIN となるように調整していきたいと考えています。

【伊豆市長】何分に多分全国にもない例だと思います。ですから、ある意味で試行錯誤の面もあるとは思いますが、長い目で皆様方も応援していただいて、この初の取組をある意味先生たちを、地域を挙げて育てて世に出していくというようなことでもあろうというふうに思っています。

【釜瀬委員】教育大学が赤間に来るとき僕は中学くらいでした。私はあるときにいい先生に出会って、先生になりたいなと思い、教員を志望したのですが、その頃からやはり出光佐三さんの想いでこの福教大ができたと思っています。それで私たちの学生の頃も、学生は試験勉強してルームで勉強会をやっていたのですが、その頃、福岡県の教員採用試験は大変厳しいので、僕は県外に出ていきました。教員採用試験の厳しい時代を経て、先生にでもなるか、先生しかねれないという経済状況によって教員採用も変動してきたと思っています。ここ数年、福岡県の採用も 60 代、70 代の人間が退職する中で採用枠が増えましたが、一方で、教育界もいじめや不登校、モンスターペアレント等で先生は大変だ、不安だということで、教育大でしっかり教員になろうという夢や希望をもつ学生が少なくなってきたという状況があるのではないかと考えています。私は、宗像はやっぱ教育大学がある、そして宗像の風土というのは温厚で、非常に教育環境に適しているというふ

うに思っています。その昔、宗像は教員と卵、宗像卵が多いというような形で小さい頃から人道教育がずっとあるんですが、そういう流れがあるので、私は宗像という教育風土というのは、教育環境は非常に素晴らしい環境じゃないかと思っています。その中で、宗像も小中一貫教育に取り組んでいった時に大学の先生方も現場に入ってきて、ルームの学生も連れて教育現場に体験というような形で、最初の頃は有志で積極的な先生だけでしたけども、段々教育大学の先生方も来られるようになりました。現場の教員も最初は大学から人が入ってくるのに抵抗があり、閉鎖的だったのですが、段々オープンな世界になってきたのではないかというふうに思っています。私は今この城山学園が第4の附属小中学校というような感じで、準附属のようになり、本当に身近にあり、体験にさっと行くとか、地域の学生が赤間界隈に住んでたら、地域のお兄ちゃん、お姉ちゃんというか、地域の子どもの教育に関わる体験がたくさんできるのではないかと思っています。それから、県立特別支援学校のこの状況は、中には抵抗があり、偏見を持っている人もたまにいます。こういう人たちは、どういう手当、どういうサポート、どういう援助が要るのか、また、教育の基本はやっぱりこういう特別支援学校の教育活動を通して、現場の教師も、それから教員も、それから子ども達も、学ぶいい機会ではないかと思っています。だから、この福岡教育大学の構内に、仮称ですが県立特別支援学校ができるということは、僕は宗像の教育にとっても、子ども達にとっても、それから教員にとってもいい機会ではないかなというふうに思っています。大変期待しているところです。それにはやはり教師たちの意識変革、それから大学の先生方の意識変革、段々変わってきて、連携は段々進んできているんですが、やっぱりまだまだ十分ではないので、もっともっと市長がおっしゃるように、地域住民を含めて、こういう素晴らしいことをやってるんだということを住民にアピールする機会が必要ではないかなというふうに思っています。楽しみにしております。

【宮 司 委 員】今日、この教育大学との連携の詳しいものを見せていただいて、本当に実現したらすごいなと思って話を聞かせてもらいました。実際、教育大学と城山学園っていうことがまずそこからスタートになると思うんですけども、この話を聞いて、うちの子どもも同様の教育が受けれたらいいなと思ったので、城山学園以外の学園も広げてもらえればなと思います。やはり最初は近くの城山学園と思うのですが、学生ボランティアとか見ても、遠い学校はなかなかボランティアが来ないと聞きました。その要因としては、学生たちが学校に自費で行ったりしないといけないからということを知り、その学校によってボランティアに来てくれる生徒さんの数が違うということを知って、宗像市の中に福教大というがあるので、平均的にというのは難しいかもしれませんが、学校によってカラーがあり、学生も様々な学校に行くことで、そこでいろんなことを学べると思います。今は城山モデルを作っていますが、それをどこの学校にも広げてほしいというのが私の希望です。

【伊 豆 市 長】はい、ありがとうございます。それでは今日皆様方からいただいた意見を参考に、本市と福岡教育大学の連携強化に向け、力を尽くして参りたいと思いますので、また引き続き、よろしく願いいたします。

(2) 宗像市第Ⅱ期小中一貫教育の成果と課題(案)について

【伊豆市長】それでは、2項目目の、宗像市第Ⅱ期小中一貫教育の成果と課題(案)についてです。事務局から説明をお願いします。

【村上指導主事】よろしくお願いします。平成18年度から、第Ⅰ期小中一貫教育、また、平成27年度からは、第Ⅱ期小中一貫教育として取組を推進して参りました。本年度、玄海学園が研究発表会を行いまして、全ての学園が調査研究を終えたという形になります。この機に、教育委員会といたしましても、これまでの小中一貫教育の成果と課題を一度しっかりと総括して参りたいということでまとめさせていただいた資料です。本日お配りいたしました資料(案)と示しております。本日、委員の皆様からご質問、ご協議いただいた内容を反映した上で、正式な総括と進めて参りたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。まず本日のスライドですが、お配りした資料の必要な部分のみを拡大したのになりますので、併せてご参照いただければと思います。資料の構成についてですが、1ページから11ページまでは、第Ⅱ期小中一貫教育の基本方針としてこれまでお示してきた資料そのものでございます。12ページから20ページまで、これが第Ⅱ期小中一貫教育の成果と課題として今回まとめさせていただいたもの、さらには21ページから27ページは今後の方向性という形で第Ⅱ期小中一貫教育が終了した後どのような方向に進んで行くのかということをもとめさせていただいたものでございます。本日は、第5章から、第6章、第7章、総括と今後に向けてという部分を説明させていただきたいと思っております。それでは、資料の12ページからご覧ください。まずは、これまでの小中一貫教育の推進状況ということです。これはもう皆様もご理解いただいていたところではないかと考えております。第Ⅱ期小中一貫教育を推進する中で、大島学園、義務教育学校として開校いたしました。この大島学園の成果と課題につきましては、今2年目を迎えたところでございますので、一定の教育活動を推進した上で、きちんとまとめさせていただきたいと思っております。第Ⅱ期小中一貫教育におきましては、目指す子ども、児童生徒像、2つ掲げておりました。自立とかかわり、という視点でございますが、まず一つ自立という視点から、ご報告いたします。この自立の視点につきましては、スタート当初、全国学力学習状況調査の全国の平均正答率を5ポイント以上上回るというような指標を掲げてございました。ただ、平均正答率という考え方が、年度によって問題の難しさがございまして、なかなか安定しないということがございます。近年では、全国を100としたときに各学校や市町教育委員会がどの程度になるかという標準化得点を採用しております。そこで、宗像市におきましても標準化得点でこれを検証することといたしました。もう一つは、昨年度まで、国語、算数、数学それぞれA問題、B問題に分かれて4区分というような集計の仕方をしておりましたが、本年度からA・Bの区分がなくなりましたので、国語、算数、数学というような枠で捉え直してお示しております。105ポイント以上ということですので、グラフで申し上げますと、下の線がゼロ、全国の平均値になります。上のラインが105ポイントのライン

ということで、第Ⅰ期小中一貫教育からその推移という形でグラフをお示しいたしますと、特に第Ⅱ期に焦点化したところ、小学校においては、105ポイントを上回る年度というのが第Ⅱ期大変多くございました。ただ、中学校につきましては、上昇傾向はありながらもなかなか105ポイントを上回ることができないということが続いているというのが第Ⅱ期小中一貫教育の結果でございます。このような結果ですので、言葉だけでいくと、目標指標自体は完全に達成できたとは言にくいところはございますが、一つ13ページの下に表にもお示ししておりますとおり、同じ子ども達がどうであったのかというところを今後は大事にしていきたいなと思っております。簡単に申し上げますと、平成26年度の時に小学6年生だった子どもが平成29年度、中学校3年生として、同じ子ども達を同じ調査を受けたというような表に直したところですので。これまでの傾向でいくと、小6の時よりも中3で下がるというような傾向がございましたが、実は令和元年度の中学校3年生は、小学校6年生の時よりも国語、数学共に上昇したというような結果が得られております。このように考えますと、これまで105ポイントにこだわっていたのですが、例えばこの国語の4.1ポイントというのは小学校の時の3.1ポイントよりも上昇しているというような結果が得られておりますので、今後はそういった一律のポイントで切るのではなくて、同じ子ども達がどのように変容したかというところを大事にしていくような指標に、見直していきながら、教育の成果、子ども達の成長を見取っていききたいなというふうに考えております。これまでの指標のみでいくと、達成できなかったという状況がございまして、成果は十分に見られておると、今後、令和2年度の子供達の結果がどのように変わっていくかということにも期待をしていきたいなと思っております。大きなグラフで見させていただきますと、小学校第Ⅰ期の頃は、105ポイントを上回れなかったという状況がずっと続いておりました。近年、105ポイントを上回った子ども達が今後中学校に進学していっておりますので、その子ども達を維持、または向上という形で、導いていきたいなと思っております。これが視点1、自立のかかわりから見た結果と分析でございます。続きまして、かかわりという視点につきましては、宗像市の学習意識調査において、小学校は学校生活は楽しいですか、中学校は学校生活は充実していますかというような質問項目で合計90%以上を超えるというような指標を掲げておりました。これは先ほどと逆で、小学校の方は90%を超えるということが難しくI期目は若干下降してしまうような傾向も見られたという結果でございます。中学校につきましては、平成26年度、第Ⅱ期小中一貫教育のスタートの年は、こえることができませんでしたが、それ以降は5年連続して90%を超えるという結果を得ることができております。中学校の子ども達が学校生活が充実しているというような結果を継続して出すことができていることは大きな成果と言えるのではないかなと思っております。これについての分析ですが、やはり小学1年生から6年生まで幅広い年齢の子どもがいる中で、楽しいですかという質問の捉えが、1・2年生の楽しさと、5・6年生の楽しさにやはり若干違いがあるのではないかなというふうに考えております。質問自体が少し大きな質問になっており、本当に子ども達の実態を捉えるものとしてふさわしかったかどうかということについて

て今後検証して、新たな指標を定める際の参考にして参りたいと思っております。これが第Ⅱ期小中一貫教育で大きく掲げておいた指標の2つを検証した結果でございます。この後は、第Ⅱ期小中一貫教育の成果と課題を、子ども達の姿に見れたところから紹介したいと思っております。成果としては、大きく3つ言えるのではないかとということで、15ページ以降にお示しいたしました。1つは、学習意欲が第Ⅰ期の頃よりも向上しましたという内容でございます。同じく、宗像市の学習意識調査の中で小学生に教科の勉強は楽しいですか、中学生には教科の勉強は好きですかという質問をかけております。この質問につきましては、小学校は3年生以上ということですので、低学年の子ども達は含まれてございません。若干近年下降傾向にはございますが、第Ⅰ期の頃よりは、小学校・中学校共に肯定的な回答をする子ども達の割合が増加してきているという結果を紹介しております。特に中学校におきましては、段階的に、年々、そのような肯定的な回答をする子ども達が増えていっておりますので、ここは小中一貫教育の成果として大きく紹介したいと思っております。もう一つは、地域への関心を示す児童生徒が増加していったという結果でございます。これは特に、第Ⅱ期小中一貫教育で地域家庭と協働した小中一貫教育と大きく謳っておりましたので、この結果が得られているということは大変嬉しいことでもありますし、まさにやったことと子どもたちの姿が繋がったと捉えております。ただ、この質問項目におきましては、全国学力学習状況調査を反映しておりますが、その質問がなかった年もございますので、質問があった年のみをあげております。グラフを見ていただいたとおり、第Ⅱ期で大きく肯定的な回答をする子どもたちが増えているという結果になっています。ただ、本年度もこの質問はございませんでした。この質問項目の内容、これまでは「地域の出来事や歴史、自然に興味はありますか」というのが主な内容でございました。近年は、それをさらに一歩進めて、「地域のために自分にできることがあると思えますか」というような少し質の高い質問へと変容していっております。ぜひ、これにつきましても、そういった子どもたちを増やす方向で我々も取組を進めていきたいと思っております。最後に、成果としての3点目が自己肯定感。これは常に言っていることですが、「自分には良いところがあると思えますか」という質問に対する肯定的な子どもたちの回答でございます。これも17ページにお示ししておりますとおり、小学校も中学校も第Ⅰ期の頃と比べると、肯定的な回答をする子どもたちが増加したという傾向にございます。やはり、地域においても子どもたちの活躍の場が増えたり、そこで賞賛の言葉をいただいたりするなど、そういった状況の中で子どもたちが自尊感情、自己肯定感を高めていった結果ではないかなと考えているところです。その他、いくつも良かったと思える点はございますが、特に子どもたちが数値として、きちんと成果が見られるものに絞って3つを第Ⅱ期小中一貫教育の成果として挙げさせていただいたところです。一方、課題として、2つ挙げさせていただきました。これもすべて成果の裏返しにあたるようなところもございますが、今後より強化していく点に絞って課題を紹介させていただいております。1つは、9年間の一貫した学力向上の取組の推進ということで、先ほどお示したとおり、6年生と9

年生の間だけを比較すると、上がったという結果が得られておりますが、その間もしくは 5 年生からスタートした県・全国調査の経年でみると、やはり凸凹が見られるというような傾向がございます。青色でお示したのが国語、オレンジで示したのが算数・数学です。理想は国語のように維持または向上という緩やかな変容が理想ではないかと。最終的には上がっていたというのが理想ではないかと思いますが、算数・数学のように若干年度によって急激に上がったり下がったりという状況も見られております。同じ子どもたちですので、年度によって大きく結果が異なるようなことはなくしていきたいなと思い、敢えてここは課題として挙げさせていただいております。常に、前の子どもたちの実態を教師がしっかりと把握して、維持向上させながらゆるやかに子どもたちの学力を向上させていくというような取組が重要ではないかと考えています。もう 1 つは、不登校児童生徒の減少に向けた取組の推進という言葉を使わせていただきました。お示したグラフは全国、県、宗像市の 1000 人あたりの不登校児童生徒数です。市よりも県、県よりも全国の方が不登校の児童生徒数が多いというのは当然のことですので、1000 人あたりという割合になおすことによって、それを比較することが可能になります。平成 17 年度の結果から、本年度はまだ出ておりませんので、平成 30 年度までの推移をお示しております。宗像市も全国と同様、若干増加していくような傾向がございますが、1 つ申し上げたいのは、宗像市の子どもたちの不登校というのは、全国、県と比較すると半数ということで、大変少ない傾向はあります。ただ、増加していることはありますので、ここは課題として捉えるべきではないかと敢えて挙げたところです。その増加率というところですが、平成 29 年度と平成 30 年度の変化のみを下の表にお示しました。全国の増加は前年度よりもプラス 2.3、県は前年度よりもプラス 4.2 というような増加の仕方でございますが、宗像市についてはプラス 1.1 ということで、増加の幅も少なくなっています。そういった意味で、19 ページの表の下に書いたように、宗像市の不登校児童生徒数は全国や福岡県と比較してとても少ない状況にあり、この点は宗像市のこれまでの学校教育の大きな成果の 1 つであり、今後も継続していくべき良さであるという文言は示させていただきました。その上で、何を課題として捉えていくかということですが、全国的な不登校児童生徒数の増加がいつ起こっているかということをより細かに見ていくと、実は 7 年生です。中学 1 年生の段階で急激に不登校の子どもたちの数が増加するという傾向がございます。それを宗像市に当てはめてみますと、このお示したグラフのようになります。7 年生は、確かに増えておりますが、平成 18 年度と 30 年度で比べると、12 人から 17 人ということで、実は 7 年生の増加率はそんなに大きくなっておりません。小学校と中学校の 8 年生 9 年生を別に示しますと、小学校段階で近年は不登校の子どもたちの数が急激に増えているという結果が得られております。これは全国や県の結果とは若干異なるところで、少し早い段階での不登校の子どもたちの出現というのが少し心配されるところです。こういったところを少し細かに分析した上で、今後の課題として、早期の不登校児童生徒を生まないというような取り組みを推進していきたいと思っております。ただ一点だけ申し上げますと、27 年度から 28 年度が急激に増えているところが

ございます。これは 20 ページの下にもお示しましたが、調査方法の変更が行われて、計上数の増加が極端に変わったところがありますので、そのような理由がございます。ただ、少しずつ小学校段階の不登校の数が他の 7 年生 8 年生 9 年生と比べると、増加率が高いということで今後の課題として挙げさせていただいております。この対応については、小学校だけの問題と考えるのではなく、小中一貫してやってまいりましたので、小中の教員が一緒になって取り組んで行きたいと考えています。ここまでが宗像市小中一貫教育の成果と課題としてまとめた、成果 3 点と課題 2 点でございます。今後につきましては、時間が迫っておりますので簡単に述べさせていただきます。21 ページ。これまでの取組の成果からということで、学力、学校生活満足度、学習意欲、地域への関心、自己肯定感等は、小中一貫教育の取組で向上させることができたという大きな成果があります。この成果を今後もぜひ引き継いでいきたいという形で、学校運営協議会制度を取り入れた小中一貫コミュニティ・スクールへと発展させていくというような大きな方向性をここで打ち出しているところです。21 ページ以降、コミュニティ・スクールの意義等を示しておりますが、これは後程お読みください。ここでの紹介は控えさせていただきます。一点だけ強調させていただきたいのが、22 ページの下段から 23 ページにお示しております学習指導要領改訂のポイント。その中でも学習指導要領の改訂を通して学校教育に期待されること。これは国が示している文言ではございますが、大きく 2 つ言われております。1 つは、学校で学んだことが子どもたちの生きる力となって明日に、そしてその先の人生につながる教育を実現すること。学校現場で申し上げますと、当該学年のことだけを考えるのではなく、次の学年、さらに次の学年といった先を見通した教育が重要ではないかという指摘ではないかと捉えております。これはまさに、これまで我々が小中一貫教育という考えの中で、小学校は中学校、その先まで見通して行ってきた教育がここに書かれているのではないかと解釈しております。もう 1 つのこれからの社会がどんなに変化して予測困難な時代になっても、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現する子どもを育成すること。これが地域家庭との協力を得ながら、社会で活躍する子どもたちにしていく、まさにコミュニティ・スクールの視点ではないかと考えております。こういった視点からも今後宗像市が小中一貫コミュニティ・スクールを推進していくということは、今の教育の動向にもマッチしているのではないかと捉えている部分です。そこで、24 ページの中ほどに宗像市小中一貫コミュニティ・スクールの基本的な考え方ということでお示しております。1 つは、中学校区ごとに学校運営協議会を設置するということです。1 学校と 1 家庭地域ではなく、中学校区を基盤とした学園、そこに学園運営協議会を設置し、小中一貫コミュニティ・スクールの実現を目指していくということで、これは全国的にも大変珍しい取組ではございますが、これまでの成果と課題を活かしていく上では、この取組が私たちはとても大事ではないかと考えております。そのような取組は、地域住民や保護者の学校運営に対する当事者意識を高めていくものでもございませし、社会総がかりでの教育を実現することにつながると考えております。そういった意味

で、小中一貫コミュニティ・スクールの重要性を伝えさせていただいたところです。最後に、25 ページ以降の宗像市小中一貫コミュニティ・スクールの導入に向けたというところですが、ここでは小中一貫教育を充実発展させていく視点と、コミュニティ・スクールの推進に向けた準備を行っていく視点と、大きく2つに分けて示しています。前半の小中一貫教育の充実発展というところにつきましては、今後、目標の設定、カリキュラムの編成、組織運営や指導体制の工夫および強化、特に目標の設定につきましては、これまで長い小中一貫教育の取組の中で、目標が少し多様化してきているというような現状が起こっております。スタート当時に立てた目標は残りながら、新たに目標が追加されていって、何が一体目指すべきものなのかと少し曖昧になっているところがあるので、目標の精選や整理を行うということ。もう1つは、今後のコミュニティ・スクールの実現化に向けて、地域や保護者にも分かりやすい言葉になおしていくということをお示しました。また、カリキュラムの編成については、目標達成に向けたカリキュラムをしっかり作っていくということと、地域や保護者とも共有できるカリキュラム、教育課程にしていくことが必要ではないかということを示しております。さらに組織運営、指導体制の工夫についても、これからは小中一貫、学校だけではなく、地域や家庭との連携も強化していく必要があるので、それを可能にする組織運営、会議研修というようなことを示しました。最後に、指導体制の工夫という点については、これまでも小中一貫教育の売りとしてきた兼務教員であるとか、教科担任制をこれからはしっかりと位置付けていくことをお示しました。その後の次年度の具体的な進め方につきましては、午後の定例教育委員会の中でまたお示しさせていただきますので、ここでは紹介を控えさせていただきます。以上をもって第Ⅱ期小中一貫教育の成果と課題とさせていただきます。どうぞ積極的なご意見をお願いいたします。

【伊 豆 市 長】ただいま事務局から第Ⅱ期小中一貫教育の総括と、今後の方向性についての説明がございました。各委員の皆さまからご質問やご意見がございましたらお願いいたします。去年同じことを申し上げたと思うのですが、小中一貫教育校という垂れ幕が東郷小学校等にかかっていますが、多分一般の方からしたら先ほどの特別支援学校と同じで、それが一体何の意味なのかということが伝わっていないと思います。この後に、小中一貫教育校がコミュニティ・スクールになると、小中一貫教育の先にあるコミュニティ・スクールになるという、言葉的には広報誌などで聞くけれども、なんだろうという思いを抱く一般の方々もたくさんいらっしゃると思います。宗像の強みは教育です。特にシティプロモーションの中でも、多くの外部の方に訴えかけていきたいのは、宗像の教育は違うということです。宗像は例えば先ほどの不登校の数字を公表していいかわかりませんが、もし公表してよければ、長谷川部長等にはそういう数字を第3者に広めていただきたいと思います。うちは県内でも不登校数が少ないよと。それはなぜかという、小中一貫教育という中1ギャップをなくす教育方針を徹底しているからですということを外部に公表していいのであれば、公表することを良しとしたいですし、小中一貫教育の先に地域の子どもは地域で育てるというコミュニティ・スクールということも今後導入していくということも出していき、そ

れが地域の子どもは地域で育てるので、朝夕の見守りとかは地域の方でやっていただいている。だから、宗像は刑法犯罪の発生率が福岡県下でも最も低い地域でありますとか、それが宗像の1つの強みというか、教育都市であるシティプロモーションとして打ち出していけるのかなというふうに考えます。

【村上指導主事】ありがとうございます。教育の現場では、大変長きにわたる小中一貫教育の取組の中で、実は子どもたちも先生方もそれが当たり前になってきていて、肯定的な回答が上がらないというのが普通なので、それとの違いを子どもたちが認識していない。もちろん保護者の方も認識されていないので、具体的に「小中一貫教育いいよね」という言葉が上がらない要因の一つになっているのではないかと思います。ただ、対外的なところで申し上げますと、実は宗像市が小中一貫教育に取り組んでいて、そのノウハウを説明してほしいというような視察であったり、学校現場の訪問というのは大変多い状況にあります。ただ、教育現場の中だけで留まっておりますので、いかにそれを市内の市民、または他市の市民の方へ伝えていくかということについては、良い方法を探したいと思います。具体的にこれがあるというところはなかなかありませんが。不登校の少なさをうちがアピールするというのは、他市の多さを語っているようにもなるので、伝え方の工夫というのは慎重にして参りたいと思います。

【伊豆市長】不登校の数をいさなくても、宗像の場合は、小中一貫教育という方向性を長年続けていることにより、不登校の要因になりやすい中1ギャップの解消につながっているということなどシティプロモーションにつながっていくような表現にして表してほしいなと思います。

【村上指導主事】ぜひ肯定的な、明るいメッセージとして伝えていきたいです。

【伊豆市長】それをいつも意識していて、宗像の小中一貫教育は当たり前ではなく、小中一貫教育をしているので、宗像では中1ギャップを生みにくい教育環境にあるということは、教育関係の皆さんは、まず宗像市役所の庁内で共有しているかということ、私はしていないと思います。だから、まずは、庁内の中で、教育都市は何が教育都市かと言ったときに、その小中一貫教育があるから中1ギャップが少ない教育都市だということを職員全員が共有しておくべきことではないかと思います。

【村上指導主事】ありがとうございます。

【教育子ども部長】市長がおっしゃる通りで、何も申し上げることはないのですが、特に教育現場に携わっていた人間ではないので、長年やってきて当たり前になっていて、知っているのは子どもからの話です。1つは、親御さんとかは知っていても、それ以外の人は知らない。それともう1つは、子どもさんはどんどん成長して、卒業して、子どもが入れ替わっていくことです。私は以前コミュニティ協働推進課にもいましたので、非常に似ているところがあって、うちのコミュニティ・スクールにはコミュニティが深く関わっていくのですが、どちらも視察はものすごく多くて、高い評価を他からも受けているのですが、そもそもコミュニティや協働を推進してきた職員は、このことがずっと入ってきたときから当たり前になって

いるので、これがとても素晴らしいものだという認識が足りていないということは、教育委員会も努力不足かなと思います。それと、コミュニティ・スクールについてですが、これはまさにチャンスと捉えて、もう一度小中一貫教育の再構築と、市民の方にも一体何なのかということを知らせ、参加を促していく良いチャンスだと思います。もっと言えば家庭も、家庭力の問題もありますので、そういう部分を再度立て直していくとか、この時代を乗り切る手段としてコミュニティ・スクールを使っていきたいと思っています。そうすると、コミュニティ・スクールが目的化してしまう。コミュニティ・スクールにすることが目的ではなく、手段ですということ。特別支援学校の話や福岡教育大学との連携の話聞いて非常に関係が深いなという印象をもちました。ひとつの立て直しは、コミュニティ・スクールに対する考え方です。それと、コミュニティ運営協議会だけが相手ではないんだと。広い視点から取り組んでいかなければならないと思います。

【主幹指導主事】私も部長と重なりますが、私は教育現場の者です。実際に市役所の中に入ってきて、学校現場だけではなく、この中で子どもたちが市民として育っていくという大きな構造の中で、私達は仕事させていただいていたのかとしみじみ感じているところです。先ほどの市長がおっしゃった特別支援学校のセンター的機能という言葉があったのですが、私は教育子ども部だけでどうこうすることではないのではないかと痛感しているのですが、このセンター的機能の中の4番目。福祉、医療、労働などとの各関係機関等との連絡調整というのが特別支援学校のセンター的機能の中に含まれているのです。要は、特別支援教育と言ったら通常、学校の中だけで完結しがちなのですが、人間が生きて育っていくときに、もちろん発達支援センターなどでサポートしてもらいながらですが、教育を受け、後に就労にあたっていくということをコーディネートしていくと考えたときに、市長がおっしゃったように全庁的に情報の共有をすること、強みは一体何で、何がどう繋がることで力を発揮するのかという整理がとても重要になると思います。そのことは、本教育子ども部で行っているコミュニティ・スクール、コミュニティ協働推進課を始めとして、連携していくこと。それから先ほどの城山学園、特別支援教育についても、福祉や他の分野との共有とか、具体的に宗像にある資産をどう活かして関連させていくのかという市全体としての構造化を私共も情報を共有しながら模索していかなければならないと感じております。そういう意味では、もちろん市民の皆さんへの情報の提供も大事ですが、それを効果的にしていくために、この庁内でここが良さだと思うとか、成果はこんなふうになっているということをしっかり話した上で、それを戦略的にどう打ち出していこうかということが、今後求められるのかなと考えているところです。以上です。

【伊豆市長】長谷川部長が分析されているので、長谷川部長の宿題だと思いますがいかがでしょうか。

【経営企画部長】定住を担当しておりますので、そういう意味では強みをいかに出していくのが大切になってくると思います。ただやはり、先ほどもご意見が出ているように、教育に関しては、あまりダイレクトにやってしまうと、マイナスの効果になる可能性もあるのかなと思います。

ますので、先ほどもありましたように、良いイメージというか、そういう形の中で「明るいメッセージ」という言葉が出ましたが、そういうところを定住のPRとして出していただけたいなと思っております。

【伊豆市長】学校の日について、今まではどちらかというと学校の日にはご自分のお子さんや、これからお子さんが通われるという可能性のある方が見に行かれることが多かったと思います。ただ、今後はより多くの方に宗像の最も大切にしている教育現場の開放や、教育現場の見学などをもう少し広く呼びかけてもいいのではないかなと思います。例えば、JAのみなさんよかったら来てくださいなどして、無理矢理でも教育現場を見ていただくことも大切なのかなと思います。宗像はこうして教育に特化して、教育に力を入れている町だということを改めて多くの人に見ていただくことも大切かと希望しています。

【高宮教育長】平成18年に小中一貫教育が始まりました。それまではどういう状況だったかという、小学校と中学校の校長先生同士もあまり話をしない。中学校が今どういうことで忙しいんだろうとか、子どもたちの課題が何なのか全くわからない状況でした。そういう中で、宗像市が小中一貫教育をした大きな狙いは、先ほどから出ていますように中1ギャップの解消でした。つまり、中学に上がって不登校にならない、不適応を起こさない子どもたちを育てよう。そのためには、先生同士がもっと知らなければならない。そして先生が「中学校のせい」「小学校のせい」と相手を攻撃するばかりでなく、9年間かけて小中学校で子どもたちを見ていこう。そのために、お互いどんな授業をしているのか、学園での校内研をしたりとか、課題のある子どもについては情報交換をしたりとか、そういうことをやってきました。したがって、宗像市のコミュニティ・スクールの特徴は、小中一貫からの出発でした。そして、先ほど市長もおっしゃったように、地域の子どもは地域で育てようという地域に支えられた学校。学校も実は地域の中であって、学校が地域へ発信することもあります。もっと学校・家庭・地域の教育力を高めていこうということです。ただ、10数年間してきて、最初のときは何でもそうですが、意欲に燃えていて無理もします。私は日の里東小学校に在職していましたが、日の里中学校の先生が体育や音楽を教えにきてくれました。それも、単にその場だけ来るのではなく、休み時間や昼休みの間、一緒に子どもと話をしたり、給食指導をされたり、子ども理解に努めながら自分の専門性を小学校で発揮されていたのです。それは日の里学園だからできるのだろうというのが一部にありました。地域の規模が大きいとか小さいとかありますが、この前も校長会で申しましたが、「各学園の状況におまかせします」ということに各学園の校長先生が安住していないのか、大きい学校だからできないということはないか、と言いました。だから、もう少し全体にレベルアップというか、共通的にやることを増やしていけないのかと言いました。以上が小中一貫コミュニティ・スクールの状況です。地域にひらくことはあったのですが、中身の小中連携は少し停滞しているのではないかというのが今の自分の印象です。

【伊豆市長】みなさん、ご意見があればお願いします。

【宮司委員】ずっとみなさん言われていたのですが、小中一貫教育が始まり、今の子どもた

ちにとっては、小中一貫教育が当たり前のものであるため、小中一貫教育がどういうものか分からず、普通の教育と思っている子が多いので、子どもたちや保護者に対して、宗像はこういう教育をしてますと再度発信することも大事なと思います。私の上の子は小中一貫が始まっていないときに入学しました。途中から始まったので、その子はそれを少し体験しています。そこで、宗像はこうなんだということを今成人になったので、その子から発信していろいろな人たちに届くと思うのですが、今いる子どもたちは分からないままこれが普通の教育だと思っているので、当たり前ではないというのを発信していくと良いなと思います。体験した親や子どもが発信したことは心に響くと思うので、市民の方にもそういう声が届いたらいいなと思っています。

【石丸 委員】市長がおっしゃったシティプロモーションで宗像の教育をどうブランディングしていくかということですが、他市と比較したときにうちがどうかということですね。そういう観点からすると、コミュニティ・スクールという言葉はあまり使わずに、地域とともにある学校という言い方が市民に受け入れられやすいのではないかと思います。コミュニティ・スクールというのは通称です。地域とともにある学校を推進していくという主体が学校運営協議会。本市の場合はすでにそういう連携が出来上がっているということです。中1ギャップもちろん重要ですが、これからは中学校卒業というゴールを目指して、子どもをどう育てるか。これを市として明確にしてはどうでしょう。中学校卒業というゴールを明確にして、そこに向かうように市はこのようなことをしてますと。そう考えると、中学校区でまとめることが合理的です。だから、小中一貫する必要性が明確になります。子どもの次元に立ったら、中学校区というのが合理的になる。そこでの子育てが一貫しているという。広い意味での子育てというのは、子育てに係わる各主体が教育課題を共有して、その解決に向けてどう協働していくかということです。ゴールに向かったときに、それぞれの得意分野がある。これは地域がした方がいい、これは学校がした方がいい、ということが明確になってくるので、そういうところをめざしてそれぞれが参加から参画していくというのが学校運営会議です。「自分達も子育てに参画できるんだ」という参画意識を醸成することにもなるので、キーワードとして地域とともにある学校ということを全面に出した方がよさそうな感じがします。以上です。

【伊豆 市長】釜瀬委員お願いします。

【釜瀬 委員】小中一貫教育を始めたとき、日の里東小学校と日の里中学校で兼務教員の導入などを行い、中1ギャップの解消に取り組んだことで、一定の成果は出たと思いますし、それが宗像市全体に広まっていくのに今年までかかりました。個人的には長かったなと感じております。もっと次の目標に向かってやらなければならなかったかなと思っているところです。でも、各学校に訪問に行き、授業形態、学習規律、板書などを見ると、以前は中学校では、教科の先生が独自の方法で行っていましたが、今の中学校は板書や授業形態は大まかに統一されて授業が行われていると思います。それから、学校教育に地域のゲストティーチャーやボランティアの方がたくさん入って、子どもの教育活動の中に関

わっています。それを学校の教師が受け入れている。地域の方をゲストティーチャーとして呼んで授業に活かしている活動がたくさんあると思います。私はそういう意味では、宗像は、地域みんなで育てる宗像や教育環境に適している宗像というのを現場にいる時から「宗像は特別支援教育が充実してますね」や「学校の教育予算が充実してますね」という話を聞いていましたので、家を建てるなら宗像と言われているという状況を聞いています。今でもそういう状況はあると思います。そういう意味では、市長がおっしゃっている宗像は何を発信するのかということで、「みんなで育てる」「住んで良かった宗像」「教育環境に良い宗像」など教育の充実を前面に出してアピールしていくのが良いのではないかと思います。今は小中一貫が言われていますが、今度は幼稚園から小学校とか赤ちゃんから小学校までなど、そういうところも連携してしてますというのをもっと宗像市民、県下、全国へアピールしていったらいいのではないかと思います。

【大庭委員】第Ⅱ期小中一貫教育の成果と課題がとても分かりやすく、嬉しい結果だったというか。ただ意識の中に、最初立ち上げる時は、不安だったけど思いもそこにいっぱいあった。あの時に、第Ⅱ期なので出てこないのは当然なのですが、思いの中にⅠ期の形を作るのにみんな頑張っていたという意識をもっていただくと、その形の上に内容が充実してくるということになったと思います。これからコミュニティ・スクールに変わっていくということで、地域と協力して進めていく時に、今も小中一貫の中でもかなり見守りなど色々してもらっているのも、より地域の方に違いが分かるというか、小中一貫でももらっていたこれが、どうつながって発展していくかというのが分かりやすくなると、地域とともにある学校、コミュニティ・スクールというどちらの名称にしても、これが発展してつながって子どものためになるんだという意識を地域の方にもってもらおうと、より充実していくかなと思います。今もしているのも、それがよりどう変わっていくかというのが分かりやすいかなと。

【伊豆市長】ありがとうございます。私自身、カタカナが入ってくると、なんとなく意味が薄まるというか、よく分からないままになってしまうので、先ほど石丸委員が言われたように、地域とともにある学校というような誰が聞いても分かるような名称が良いかと思います。コミュニティ・スクールという言葉を使わないといけないにしても、セカンドタイトルとして、地域とともにある学校というような言葉を入れても良いのではないかと思います。そうすると、多くの方がコミュニティ・スクールが何を指しているのかを理解しやすくなるのではないかと。そして、小中一貫教育の良さを含めて、子どもたちが小学校に入ってきた時に、宗像の教育というのはこういう小中一貫教育をやっており、こういうことを目指しており、このような効果がありますというようなことを保護者の方々に改めて説明していただいて、こういう方向性で宗像は「地域とともにある学校」を目指していますということを伝えていただきたいと思っています。また、教育長には、教育現場の先生方にシティプロモーションも含めて伝えていただければと思います。よろしくお願ひします。

(3) その他

【伊豆市長】3項目のその他に入ります。何か、その他みなさまからご意見等がございましたらお願いします。ではまた私からで恐縮ですが、教育委員の皆様方には、様々な場にご出席いただいております、例えば、成人式にもお越しいただいております。他にもご多忙の中、多くの式典等にお越しいただいておりますが、そのような式典のご案内をさせていただくことが委員の皆様方にとってご負担であれば、教育長とお話をして今後の形態について考慮させていただきたいと思っています。

【高宮教育長】学校支援訪問では、お忙しい中、手分けして学校を訪問し、直接先生方にお話していただき、教育に関わっていただいていることが、教育委員さんにお力を発揮していただいているのではないかと考えています。市長さんがおっしゃったのは、成人式はどちらかというと多くの方で祝ってあげようということで、担当課が依頼をしているものだと思います。お祝いしたい気持ちはもちろんあるでしょうし、一方では大変お忙しいみなさんですので、無理をさせているのではないかとすることもあります。そういうことで、出席していただく式典等について今後、精査していこうかと市長と話しています。具体的にはその都度お話しします。

【伊豆市長】これは教育長と私に一任いただくということでよろしいでしょうか。

【大庭委員】温かいご配慮いただきありがとうございます。個人的なことを言ってもよろしいでしょうか。成人式は、普通では参加することがない会だったのですが、ご招待いただいたので参加したら、学校現場で働いていた当時、校長室で関わっていた子がいました。当時、その子は全体の中に入れなくて、校長室で関わっていました。それこそ式場の中にも入れなかったのですが、私が式場から出てきた時に、きれいに成人式の用意はしていて、「先生、中にはやっぱり入れない。でも写真だけは撮りたいから」と言ってくれました。その子とは多分出会うことはもう無かったと思います。ですが、そういう機会を与えていただいたことで、会うことができ、とても感動して帰らせていただきました。これは個人的なことなので、なんとも言えませんが、ご招待いただいて選択するのは個人の自由にしていただければいいなと私は思います。

【伊豆市長】他にも皆様方にいろいろご迷惑をかけておまして、ご案内するからにはご案内するだけの体制をもって、ご案内しないと非常に失礼だなと私自身思っているところです。つまり、案内はしているけど、車はどこに停めたらいいかなどもなく、その他大勢の中で、なおかつ呼ばれているから座るところも決まっているというような今までのご案内が果たしてみなさんにとって失礼ではなかったかなと私自身を感じることもありましたので、多くのイベントの場にご案内していますが、今後については教育長とも合わせて協議を進めていきたいと思っています。それでは、事務局に一度お返しします。

3 閉会

【教育政策課長】たくさんのご意見ありがとうございました。本日も協議いただいた項目について

は、教育大学との連携による本市の教育の充実、小中一貫教育の推進による本市の教育の充実を進めてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。次回の会議につきましては、令和2年7月に開催を予定しています。詳細については、またご案内申し上げますので、よろしくお願いいたします。では最後に閉会の挨拶を市長お願いします。

【伊 豆 市 長】みなさん、ありがとうございました。以上を持ちまして、令和元年度第3回宗像市総合教育会議を閉会いたします。お忙しい中、本日は誠にありがとうございました。